

所属・資格 体育学科・准教授

申請者氏名 伊佐野 龍司

研究課題		ボールゲームにおける指導者の借問能力育成に関する理論的研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>児童・生徒たちの学習者の学びに強く影響を与えることとして、学習過程や学習形態以上に教師の専門的力量やそれに裏付けられた教師の指導性、指導方略の適用が指摘されている。この体育教師が具備すべき専門的力量的の一つが「学習者の運動を見抜く」運動観察能力であることは論を俟たない。さらに、指導者には、自ら運動感覚を何一つ言葉にできない学習者から、現前化されている運動感覚能力のポイントを次々に問いかけて、その微妙な運動能力の地平構造まで聞き出す借問能力も求められている。しかしながら、言葉に指導しにくい運動感覚を学習者から紡ぎ出せる借問能力の存在とその質問内容の体系化を検討していくことは、現在の指導者カリキュラムでは含まれていないのが現状である。運動が「できる」だけでなく「わかる」ことを保証することが重視される昨今の事情を鑑みると、体育教師自身が生徒の運動感覚を学習者から紡ぎ出せるようにすることは重要な問題圏となる。そこで、本研究はこれまでの研究を背景に、ボールゲームにおける指導者の借問能力育成を企図した上で、当該能力の養成を下支えする理論や先行研究を概観し、現状を整理することに着手する。</p>
	研究の結果	<p>借問能力を育成するには、単に相手に尋ねることに終始するのではなく、自らの運動経験と運動知識を基に、学習者の力動的な運動経過に自己を没入させ共感させる必要がある。さらに、他者の運動を共感するためには、指導者が「自らの動感の発生様態を分析できる動感自己観察の能力を基盤にしてはじめて可能になる」(朝岡, 2019, p.122)のである。ここでいう自己観察は、「自らが動く時の感じを振り返って観察すること」という自身の内観を意味する。ここまでに、自己観察の力量を高めるための研究が着手されてきた。運動の観察者では、体育授業の児童・生徒(吉田, 2004; 中村, 2011; 三木, 2015)、教員養成段階の学生(白石, 1990・1991; 佐藤, 2002; 中村, 吉田, 2018等)に展開されている。さらに、ボールゲームに焦点化すれば、運動の自己観察に関連する動感志向性の分析に着手した先行研究をゴール型ボールゲームに焦点化して概観すると、既に複数の研究が提出されている(e.g., 寺田・佐野, 2015; 寺田・佐野, 2017; 曾根, 2017; 伊佐野ほか, 2018)ことが明らかとなった。</p>
	研究の考察・反省	<p>借問能力の育成にあたっては、スポーツ運動学ならびに、自己観察・他者観察の重要性が明らかとなった。特に実技実践における自己観察能力の形成について研究を進めていく必要がある。現状、ボールゲームにおいて学生を対象にした研究は、伊佐野ほか(2024)に限られている。当該研究は研究者による借問し、学生が自己分析を行うことが報告されている。それを基盤に、今後は学生相互の自己分析・借問の実施など発展的な実践が求められる。しかしながら、その際の対象となる実践や状況など詳細を検討しなければならない課題が浮き彫りとなった。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>研究発表 17th European Congress of Adapted Physical Activity Research on supporters' learning in sports activities through university and local community collaboration. 2024年6月12日/ Sevilla.</p> <p>大学地域連携学会第4回大会 スポーツ教育連携事業を対象にした大学地域連携に関する国際調査 ―ドイツの大学を事例として―. 2024年11月16日/ 茨城.</p>	